岡山県立短期大学紀要　43巻　157～168頁（1991）

生涯学習のなかの美術について・2

―学習要求に基づいたカリキュラムの作成と実施報告―

関　﨑　　哲

はじめに

今日，生涯学習は広く社会に定着し，その名目ばかりでなく，内容もともに一層の充実が図られている。もともと，生涯学習というものは，人々の自発的意志に基づきそれぞれに適した手段と方法で行なわれるものであり，こうした生涯学習の充実に対する要望は，学歴社会から生涯学習社会への転換を図るという社会的側面，学校教育に関わる様々な問題の解決の方策の一つとして学校教育の側面，刻々と進む技術・知識の高度化細分化・情報化に伴う専門的な教育の側面，また生活水準の向上にともなう生きがい追及のための文化活動・スポーツ等趣味的な活動の側面から等，様々な角度からあげられている。このような生涯学習を考えるとき，その範囲は極めて広く，学校教育のような意図的・組織的な学習から，専門的な企業内教育，さらにはそうした実利的側面を持たない文化・スポーツ・ボランティア活動などもその中に含まれるものとなり，学習の場という観点から見るならば，既成の小中高大学など学校はもちろん，企業・デパート・博物館・美術館・図書館・公民館など地域社会のあらゆる施設，さらに生活のいろいろな場面が，学習の場として機能するものとしてとらえられる。本論文は，こうした生涯学習の状況と美術教育の関わりについて，一昨年実施したアンケート結果[1)]をもとに美術（特に絵画）の学習に対する具体的な学習要求を満たすためのカリキュラムを設定，実施し，その結果を報告するものである。

1．生涯学習における美術

美術を含む文化活動・スポーツ・レクリエーション等，このような趣味的活動は，現代のような，様々な知識・技術が細分化された社会において，人間的な趣味，感動を実現し，思考と行動，感受と表現といった総合的な活動を我々にもたらすことによって，個々のなかの様々なアンバランスを健全なバランスのとれた状態に改善し，現代社会特有のストレス解消する役割をはたす。なかでも，美術に見られるような，五感全てを活用し，思考し，自分の「手で描く，つくる」といった造形活動は，人間だれもが持っている根源的で欠くことのできない活動であり，どんな形にせよ，こうした活動を一生涯にわたっておこなうことができるようになることは非常に有意義なことである。

一般にいわれるように，人間の成長にとって芸術というものは計り知れない役割をはたし，その必要性は今日だれしもが認めるところとなっている。人間本来の造形意欲を引き出し様々なものに興味を持ち感動する人間の健全な生活の，基礎となるものであるということを念頭に置いて，生涯学習の活動を進めていかなくてはならない。

2．学習内容に対する要求の調査結果概略

―何か望まれているのか―

美術教室参加者に関しての，生涯学習や，生涯学習のなかの美術に関することは，前回の報告でまとめた。ここでは調査結果のうち，報告するカリキュラムの基本となった美術の学習内容に対する要求について簡単にまとめておく。

美術の学習の目的は，ほとんどが，「生活を豊にするため」「教養を身につけるため」「仲間づくりのため」といった趣味的な回答がほとんどを占め，楽しみながら学習をしていきたいという学習者の希望が表れている。（図1）

学習内容のレベルについては，かなり高度なものが要求されている。（図2）この調査が美術の学習に参加している者を対象に実施されていることを考えると，ここで要求されているようなレベルの高いものと，初心者向けの基礎的なものの両方を設定することが望ましいようである。

具体的な学習内容に対する要求は，「油絵」「日本画」が中心で，「人物画」「静物画」「風景画」と

いった具象的傾向が強く，具象表現の基礎的技術である「デッサン」を学びたいという希望も多くなっている。「色彩」「構図」「描画技法」について学びたいという希望についても，具象的な側面から実際の過程で学習していくことが望まれていると見るべきであろう。（図３）

こうした調査結果をふまえたうえで，カリキュラム作りをすすめ実施した。実施にあたっては，学習の目的が「生活を豊かにするため」ということにあることを念頭に置いて，学習内容の充実を図るあまり知識や技術の詰込み一辺倒にならないように気をつけなくてはならない。

３．カリキュラム作成意図と実施報告

鑑賞と実技は，ここでは便宜的に分けているが，実際には年間あるいはある程度限られた期間のカリキュラムの流れの中で関連づけて実施し，能動的な鑑賞と，知識や考察に裏付けられた制作が行なわれるように心がけた。なお，以下に示すカリキュラムは，1989～90年にかけて，つくば市内の幾つかの絵画教室，サークルで実施したものである。[2)]

３－Ⅰ　鑑　賞　編

・鑑賞における基本姿勢

学習者が，すでに持っている幾つかの知識を，時代的に関連づけたり，西洋・東洋を同じ視点から比べることで，知識と知識，作品と作品の関係を明らかにし偏りのない総合的な美術に対する理解を深めることを第一のねらいとした。また，学習者自身の制作の際に役立つような，技法的な制作のうえでの問題にも触れるとともに，作品の背後に存在する文化的・社会的・思想的背景を含め作品成立の複雑な過程を理解することで，学習者自身の制作に能動的に関わるような鑑賞となるようにした。カリキュラムを実施した講座は，油絵が中心の講座であったが，できるだけ多くの日本画も示し，西洋との伝統文化の違いを解説したり，使用する材料の違いによる表現方法の違いも示しながら作品を鑑賞した。以下，スライドを用いた講義録の中から，簡単にまとめたものを記す。

(1)　風景画について

求められている具体的な学習内容のなかで，描きたいものとして要望の高かったものが「風景画」である。したがって内容は古今の作品を鑑賞しながら，自分たちは，どのように風景画を描くかということを中心のテーマとした。現代に至るまでの風景画の成立と展開を西洋画中心にたどりながら，ほぼ同年の作である，レオナルドの「モナリザ」（1503－6）と，雪舟の「天橋立図」（1502）を取り上げ，背景でしかなかった西洋の風景と，古くから風景それ自体が絵画の主題となっている日本の風景に対するとらえ方の違いをのべ，自然観の違いでどれだけ西洋，東洋の風景の表現が異なるか比較した。

西洋では，17世紀フランドルにおいて風景は風景自体で絵画の主題となり，19世紀イギリスのコンスタブルやターナーなどを経て，印象派に至り，風景画というものが，一般に非常に親しまれるものとなった。日本では，山水画，屏風絵障壁画と，古くから風景を題材とした作例は多く，江戸時代後期，浮世絵の広範な流行とともに，葛飾北斎の「富岳三六景」，安藤広重の「東海道五三次」等に代表される風景版画が現われ，一般庶民にまで親しまれる作品となった。風景画は，率直な自然描写のみならず，フォービズム，シューレアリズム，抽象表現主義といった芸術の形式のなかで，概念表現に重きを置いた作品を数多く生み出し，現代のような多様な個性の表出としての絵画の一端を担う重要なジャンルとして成長してきたのである。

ごく基本的な構図の問題は別として，風景画を描くときに重要になってくるのが，空間の把握の方法である。西洋ルネッサンス以来のパースペクティブの手法や，空気遠近法，東洋的な独特の上下遠近法，余白等，空間を表現するための，古今東西様々な空間表現の理解を深めた。制作の実際の場面では，こうした空間表現を考えるのと同時に，風景としていったい何を描きたいのか，とくに，空間のなかにあるもの（建物など）を描きたいのか，それとも風景自体の空間の広がり（空間それ自体）を描きたいのか，自分のなかではっきりさせてから描きはじめることの必要性を作品に即して解説した。

(2)　静物画について

静物もまた描きたいものとして人気のあるものの一つである。ここでは，静物画に取り上げられるモチーフに着目し，モチーフの選択と，選択されたモチーフによる表現効果，さらに描写方法（質感，構図，色彩等）について解説した。

静物画は，描こうとするモチーフを選ぶ段階から制作が始まっているといってよい。真新しいビンを描くのと，埃に紛れたビンを描くのとでは，描くときの心情が違うし，そうした作品を鑑賞する場合，受ける印象もまったく異なったものになってくるのである。日

本画と洋画のモチーフの違いを，花鳥画（地面から生えている草花，自然のなかで生活している動物）西洋の静物画（切られ，花瓶に活けられた草花，殺され食卓に乗せられた動物）を例に，モチーフに表れている双方の自然観や文化の違いを明らかにしていった。また，表現のねらいが特別なものとして，キュビズム，だまし絵（トロンプルイユ），寓意画を示し，客観描写だけではない静物の世界を解説した。

絵画の歴史のなかで最も古い静物画の作例は，イタリア，ポンペイの壁画である（紀元前一世紀～紀元，秘儀荘に代表される）。この壁画は，食堂の壁面に日常使用する食器類が装飾的にレイアウトされ，モチーフの金属の質感表現など，高度な写実技術で描かれている。静物画は，元来このようにモチーフ自体の描写の方法はともあれ装飾性の強いものであった。しかし，神話画や宗教画が全盛の頃には，静物画は，表立って絵画史のなかに登場してくることはなかった。やがて，16世紀のスルバラン，カラバッジオ，を経て，17世紀のフランドルの成熟した市民文化において静物画は，絵画のなかでも人気のあるジャンルの一つとなってくる。そして，18世紀のシャルダン以来，現代のモランディまで，純粋な装飾性や日常生活の反映としての静物画から，単純なモチーフと構成による純粋な静物画まで静物画は多様な変遷をたどる。

(3) 人間描写について

① 人体素描について

いわゆるドローイングとは異なる制作のための素描について解説した。素描を作品制作のための個人的な造形思考の過程としてとらえ，客観的なとらえかたのもの，主観的なとらえかたのものなど幅広く取り上げ，すぐれた素描のなかに存在するリアリティーに目を向けるよう，解説を行なった。安井曽太郎の裸体素描のような，画家の基礎訓練とされているアカデミックな裸体素描でさえも，客観性を地道に追及するなかで次第に画家の個性が表れ，絵画的な感動が作品にあらわれる例を取り上げた。続いて，彫刻家の素描などに見られるような対象がきわめて明確に描きだされたもの（立っている感じ，動いている感じなど）を示した。

素描は，作家個人の造形思考が端的に表れるものであり，普遍的なリアリティーをもちながらも，個性的なものになっている。それは，単に形態や量感を描写しているだけでなく，絵画的な感動を表現しているものも多い。ただし学習者が，実際に素描する場合には，あえて個性的になろうと努めるよりも，見えているものの感じを素直に，どうすれば端的に表現できるか工夫することが大切であり，そうした態度から生まれてきた作品こそが各々の個性を表したものとなるのである。

② 人物画について

人物画は，人間の形が描かれているものという捕えかたをすれば，古代，エジプト・ギリシャから存在しているが，それは神話的なもの，宗教的なものであり，一般にここで実施しているような学習の場において描かれる人物像とは性格が異なる。現在我々が描く人物画のモデルは，描き手の身近な人であったり，普通のモデルである。このような人物を描く態度は，17世紀以降の，個人を尊重し，その存在を肯定し，個人のなかに美を見付け，それを表現するという近代的な人間表現の態度である。こうした考えからこのような近代的人間像と，前出の神話的・宗教的人間像と2種類に分けて解説を行なった。

ギリシャ美術に代表されるような，純粋な美的理想が実現された神話的人間像や，ローマ以降の，威厳や神聖さ，あるいは思慕といった感情を沸き起こさせるような宗教的人間像，また社会的権力を誇示するような，王侯貴族の肖像などが，近代以前の人間像としてあげられる。そうした人間個人の内面に踏み込むことが本来の目的ではないものでも，現代の我々にある種の感動を与え得るのは，本来の目的ではないとはいえ，結果的にその作品が描かれた人物の内面を表現しているからか，あるいは描き手としての画家の優れた個性が，その作品に表れているからに他ならない。そしてこの点は，他でもなく，近代的人間像の条件そのままなのである。

17世紀以降の人物画は，モデルの内面を表現しようとするものが主流になるが，その典型的なものが，レンブラントの自画像群である。そして，これらは，そのまま画家の個性の表出ともとらえることができる。個性の表出は現代に近付くにつれ人物画の主体となり，モジリアーニの人物表現のように，だれを描いても，モデルの内面以上に画家自身の内面が表に出るような作品が多く見られるようになってくる。

3－Ⅱ 実 技 編

・実技カリキュラムにおける基本姿勢

実技カリキュラム設定にあたっては，第一に作品制作上で造形や，表現の面で新しい発見があること，第二に使用する材料は入手しやすく，またそれにかかわる技術技法も，基本的であること，とした。これは，

このような講座で学んだあとも，個人のレベルで制作を継続でき，その制作が創造の感動を伴った制作活動となることをねらいとした。

(1) **グリザイユ**（図Ⅰ－①②③④参照）

準備

モチーフ

＊ワインボトル＊布＊オーム貝（何れもトーンの見やすいシンプルな色調のもの）

使用材料（指定色）

＊キャンバス10号（できるかぎりイエローオーカー等中間調子の地塗りをしたもの）＊絵具・白（シルバーホワイト・チタニウムホワイト）青（コバルトブルー・ウルトラマリン）茶（ローアンバー・バーントアンバー）

制作手順

〔構図，粗描き〕 コバルトブルーかローアンバー等で，構図を決め形を取っていく。

〔描写〕 形と，全体のトーンを確かめながら，単色で描きすすめる。明部には白，暗部にはコバルトブルーとローアンバー等を混ぜた暗色を作り描く。画面により緊張感を持たすため，マチエールに変化を持たすようにする。（絵の具の付け方に変化を持たす）布や貝殻の模様も同時進行で描きすすめる。トーン，質感，空間を，確かめながら描きすすめ完成とする。

・制作時間　4時間

グリザイユは本来単色画のことである。ここでは，好みにより青を多く使ったり，茶を多く使ったりすることで，最終的に作品を，暖色系，あるいは，寒色系に仕上げ，単なる習作としておわらぬようにした。色数を制限することで，全体のトーンや，モチーフそれぞれの質感マチエールに注意することが容易にできるようになる。もし完成の時点でで満足できない場合は，作品を乾燥させた後，樹脂系のオイルを使い，固有色をグレーズして完成度を増すということも可能である。

(2) **模　写**（図Ⅱ－①②③④参照）

準備

模写する作品および，作品図版の選定

＊模写する作品は，日頃から興味をもっている作家の作品を選ぶ。作品図版は，実作品の原寸に近い大きさで印刷の鮮明なものを選ぶ。＊その作家や作品についての美術史的知識，技法，色彩，構成について，スライドや図版を使いながら研究する。

材料

＊キャンバスは，模写する作品とほぼ同じ大きさのものを用意し（ここでは10～15号程度），それぞれの作品に合った地塗りを施す。＊研究結果をもとにオイル，絵具，筆などを準備する。＊トレーシングペーパー＊鉛筆

制作手順

〔絵柄の転写〕 図版にトレーシングペーパーをかけ升目を引く。同じように地塗り済みキャンバスに升目を引き，対応する升目を頼りに絵柄をキャンバスに転写する。

〔描画〕 図版をよく見て，色彩，マチエール，タッチ等に気を配りながら模写する。

・制作時間　10時間（4時間×2回＋2時間）

模写は，絵画の総合的な技術の習得に，非常に役立つものである。構図，明暗や色彩の構成，またオイルの扱いや，絵具の扱い（色の混合や盛り上げ，マチエール）さらには，模写する作家にかかわる美術史的な知識に至るまで，一枚の模写の作品を仕上げるということだけで総合的な学習が可能になる。

(3) **質感表現（マチエール）**（図Ⅲ－①②③④参照）

準備

モチーフ

＊様々なテクスチャーをもつものを使ってモチーフを組む。ここでは，ブロック（ざらざらしているもの），卵（つるっとしたもの），布（織目の質感），廃材の木（木目や木の割れた質感）をモチーフとして設定。

材料

＊キャンバス12号＊厚塗り用メディウム（各絵の具会社のものがあるが，ここでは，ルフラン・ブルジョワ社メディウムダンパートマンを使用）＊ムートン地塗り用（天然白亜）＊広口容器3個（空缶など）＊マスキングテープ＊新聞紙＊ぼろ布＊大きめの筆（22，24号程度）＊ペインティングナイフ

制作手順

〔構図〕 キャンバスに鉛筆でモチーフの形を取り構図を決める。

〔マチエール作り〕 いろいろな質感をだすための描法を解説し，実施する。

○ブロック・スパッタリング（絵の具を粒状に滴らす）

シルバーホワイト＋厚塗り用メディウム＋ムートン地塗り用（容量比約2：1：2）＋画溶液（適量，絵の具が程よく滴る程度）を基本に，これに暗色（ローアンバー，テルベルト等）を適宜加えて，白色を含む3

色（明度の段階が3段階のもの）を容器に作る。キャンバスの上のデッサンの，ブロック以外の部分にマスキングし明度の低いものから順番にスパッタリングする。（3色の，スパッタリングは，多少時間をおき，滲みを避ける。）

○卵・ナイフによる平滑な厚塗り

ブロックの時と，同様に作った白（ただし，画溶液はごく少量，絵具は滴らない）をペインティングナイフに取り，卵の部分に一息で楕円形を塗り付ける。

○木・タッチを生かした厚塗り

卵の時に作った白にロアンバーなど木の固有色を少量混ぜ，豚毛の筆，ペインティングナイフなどによって木の部分に，木目や木のテクスチャーを再現する。

○布・キャンバスの布目を生かして

地塗りなしのキャンバス目を利用し，薄塗りで布の質感をだす。

○背景（壁）

ペインティングナイフなどを使って，あまりうるさ過ぎないマチエールを自由に作る。

〔描画〕 以上のようなマチエールができたら乾燥させ，主にグレーズで，仕上げてゆく。この場合，個々のマチエールが強いので，画面全体に注意を払い，作品が統一感を持つよう描画をすすめる。

・制作時間　12時間（3時間×4回）

油絵具が他の描画素材と異なる大きな特徴として，絵具自体の材質感マチエールというものがあげられるが，不用意な絵具の盛り上げや，水彩風の薄塗りでは，油絵本来の美しさを持ったものとは言えない。そこでここでは，静物を描く過程で，実際のモチーフのテクスチャーをキャンヴァスに再現してみることで油絵独特の，適切な厚みを持ったマチエール表現を試みた。

(4) 空間表現（鏡のある静物画）（図Ⅳ－①②③④参照）

準備

モチーフ・材料

＊鏡＊花瓶＊ワインボトル＊オレンジ＊布＊キャンバス12～15号（イエローオーカー等地塗り）

制作手順

ポイントは，鏡に映ったモチーフと実際のモチーフを如何に描き分けるかである。調子の違いや，角度の違いに注意して描きすすめる。

・制作時間　12時間

（スライド鑑賞も含む。4時間×3回）

絵を描く場合，空間の問題は避けて通ることのできない問題である。これは具象的な描写方法を取る，取らないにかかわらず，制作のなかで解決してゆかなければならない問題であろう。ここでは，鏡をその絵画のモチーフとして持ち込むことで，単なる静物画以上の複雑な空間を絵画に持ち込み空間表現に新鮮な視点を持ち込もうとするものである。鏡をモチーフとして画面に登場させた作品は美術史のうえでも数多く見受けられる。それぞれの作家，時代背景によって，鏡に込められた意味は異なるが，空間の表現という観点から見れば，このように画面に鏡を描き込むことによってある種の臨場感を見るものに与える。絵のなかに描き込まれた鏡に映る空間は，描き手の背後の空間であると同時に，それはそのまま絵を見ている我々の背後に広がる空間ともなるのである。「アルノルフィニ夫妻」ヤン・ファン・アイク，「ナルキッソス」カラヴァッジョ，「ラスメニーニャス」ベラスケス，フォリー・ベルジェールの酒場」マネなどの作品をスライドで鑑賞したのち，制作に入る。

(5) 自画像（透明描法による）（図Ⅴ－①②③④参照）

準備

材料

＊鏡＊研磨紙（耐水サンドペーパー＃150＃400）＊アクリルジェッソ＊ムートン地塗り用＊ボール＊刷毛＊鉛筆＊練りゴム＊ニードル＊フキサチーフ＊ぼろ布＊穂先の柔らかい筆（大中小数本）＊キャンバス8～10号

制作手順

〔地作り〕 市販キャンバス8～10号にサンドペーパー（＃150）を麻布面が見えるほどにかける。この場合サンドペーパーを軽く水で湿らせながらかけると，削りかすも飛ばず作業がしやすい。削りかすを布で拭き取り，乾燥させる。アクリルジェッソを，ボールに取りムートンを振込む（容量比2：1程度）。よく撹拌しながら3～4回大きめの刷毛で地塗りする。ムートンを振込むことによって地塗りに，ボディーが付くとともに，吸収性が増す。（さらに，ムートンは油を吸うと半透明になり人の肌の微妙な感じがでやすい。）地塗りは，乾燥した前の地塗りの刷毛目に直行するように塗る。乾燥したら，平滑になるようにサンドペーパー＃400をかける。

〔デッサン〕 鉛筆で，鏡を見ながらキャンバスにデッサンする。デッサンが終ったら，ニードルで輪郭や髪の毛，眼鏡などポイントを引掻き溝を作る（描く過程で溝に絵の具がしみ込みエッチングのような細いはっきりとした線となる）。練りゴムで余分な鉛筆粉を取り去り，フキサチーフで軽く固定する。

〔描画〕 絵具は，オイル（ペインティグオイルあるいは，パンドル）で薄く溶き使用する。白は使わず，明るいところ，白いところは，絵の具を拭き取って表現する。絵の具で描くのと同様に拭き取るときも描いているつもりですすめる。背景は，白あるいは単色のぼかしで表現し，人間のほうに描画の神経を集中させる。目や，眼鏡などにハイライトを白で不透明に施し乾燥させ，描画を繰り返す。

・制作時間　12時間（4時間×3回）

自画像は，レンブラントや，ゴッホに代表されるように，近代的な自我の意識の確認とともに描かれるようになってきたものであり，端的に自己を表現する題材として有効である。描いたり拭き取ったりしながら慎重に描きすすめられる透明描法を使って微妙なニュアンスまで表現してみる。

(6) **ガラス絵**（図Ⅵ－①②③④参照）

準備

材料

＊ガラスいり額縁（ここでは，サムホール大のもの）＊デッサン用紙＊鉛筆＊水彩絵具＊油絵具＊筆＊和紙＊水張りテープ

制作手順

〔デッサンとガラスへの転写〕 紙にデッサンをしサインまで入れる。それをガラスの下に敷いて水彩絵具で上からデッサンをなぞる。

〔描画〕 ガラスを裏返し，水彩絵具で，輪郭やハイライトを描く。水彩が乾燥したら，油絵具でモチーフ中心に描く。油絵具が乾燥したら，背景を水彩絵具で描く。水彩絵具が乾燥したところで全面に油絵具を塗る。油絵具が乾燥する前に，補強のために裏側から和紙を張りつける。

〔額装〕 ガラスを額縁に入れ裏側から合板をあて水張りテープで固定し完成。

・制作時間　12時間

（スライド鑑賞も含む。4時間×3回）

ガラス絵は，古くからヨーロッパで聖像イコンなどを描くものとして発達した。その後世界各国で工芸的なものとして広く描かれ飾られるようになっている。ここで取り上げたのは，ガラス絵がガラスの裏側から描くために，その描画の手順が，ちょうど油絵を描くのとはまったく逆の手順になることに注目したためである。油絵の場合，まず地塗りがありその上に背景や対象を描きだんだん細部の描写に入り最後にグレーズやハイライトをして一枚の絵が完成するわけであるが，ガラス絵の場合は，その逆で，まずグレーズやハイライトを描き……最後に地塗りをして完成という手順である。このような手順であるため，完成のイメージはもちろん，構図や色彩や，完成までの手順すべてが，頭の中にはっきりとイメージされねばならない。そしてなにより，次の一筆でその絵がどう変化していくか，頭でイメージしながら描きすすめられるような訓練になるのではないかと考えたのである。もちろん，作品がガラス絵として，おもしろいものに仕上がることもねらいの一つである。制作の過程では，あまり手順ばかり考えて，硬いものにならぬよう滲ませたり削ったりすることでニュアンスにとんだガラス描ができるように心がけた。

(7) **箔を使った表現**（図Ⅶ－①②③④参照）

準備

＊キャンバス，サムホール（シルバーホワイトをペインティングナイフで平滑に塗ったもの）＊金箔＊ろう原紙＊箔ばさみ＊シッカロール＊脱脂綿＊はさみ＊鉛筆＊速乾性ペインティングオイル＊刷毛（小）

制作手順

〔箔あかし〕 金箔のうえに，箔より一回り大きく切った，ろう原紙を重ね上から箔ばさみで強く撫で，箔をあかす。（泊を扱いやすいように，ろう原紙に付ける。）箔を使用する面積に応じて，何枚かあかしておく。

〔下描き〕 地塗りの乾燥したキャンバスに鉛筆でモチーフをデッサンする。

〔箔置き〕 背景あるいはモチーフの金属部分など，箔を置く場所に，刷毛で速乾性ペインティングオイルを塗る。約1時間後オイルが乾き切る直前を見計らって，箔を置く。箔は，箔を置く面の形に添って，シッカロールを付けた脱脂綿で拭いたハサミで切ってから置くと扱いやすい。あかした箔を箔面を下にしてキャンバスに置き，ゆっくりと，ろう原紙を剥がせば，箔は画面に定着する。定着がよくないときは，ろう原紙を剥がす前に上から脱脂綿で軽く押さえてから剥がす。箔を置き終えたら乾いた刷毛で余分な箔を取りのぞく。

〔描画〕 透明不透明に注意し質感を損なわぬよう細密描写を行なう。特に金属部分などは，箔の上に透明に描くことで質感がでやすい。

・制作時間　12時間（4時間×3回）

金箔など箔を使った絵画の歴史は長い。西洋では，宗教画に多く見られ，磨き込んだその箔の光は神聖な超越者の光の象徴として用いられていた。日本では，装飾性を高めるために，画面に散らしたり，金地銀地

図1　生涯学習美術学習者の学習目的

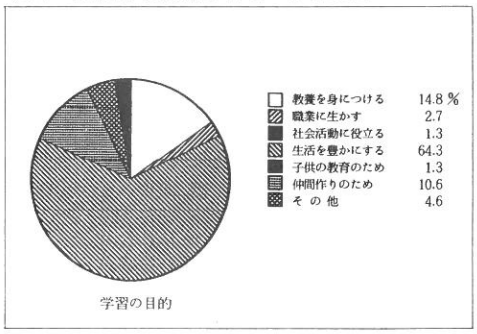


図2　生涯学習美術学習者の希望する学習レベル

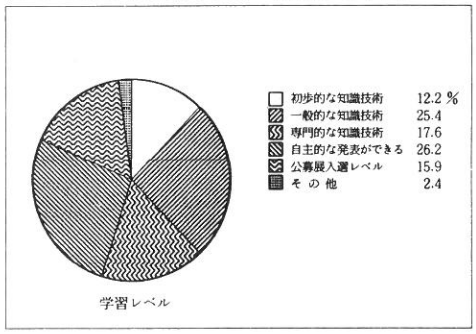
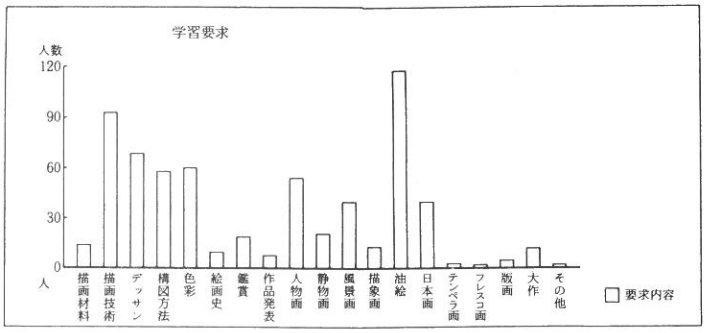
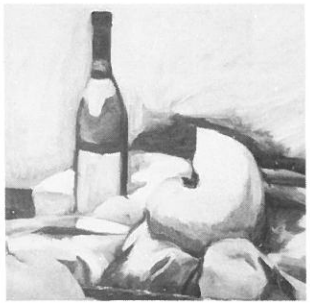


図3　生涯学習美術学習者の希望する具体的学習内容

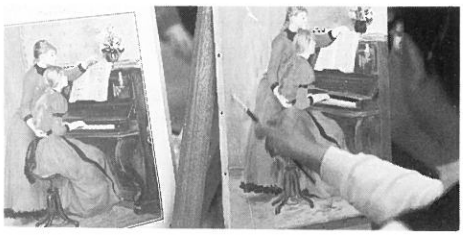


図Ⅰ　グリザイユ



① モチーフ実写	② 描きはじめ
③ 描きこみ	④ 描きこみ

図Ⅱ　模　　写

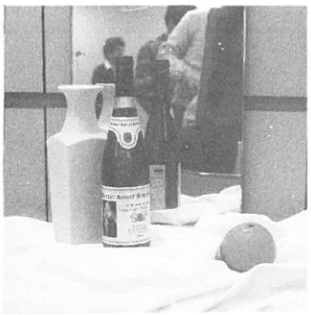


① 生きたタッチで	② よく見比べて
③ 模写作品 （セザンヌ）	④ よく見比べて

図Ⅲ　質感表現（マチエール）

① 完成作品	② 完成作品
③ ディティール	④ ディティール

図Ⅳ　空間表現（鏡のある静物画）

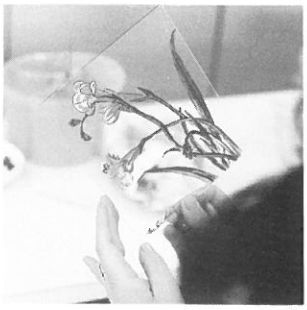


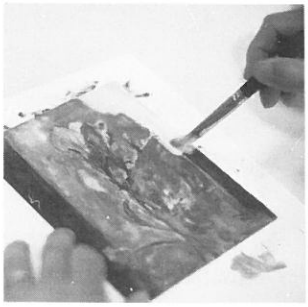
① モチーフ実写	② 描きこみ
③ 完成作品	④ 完成作品

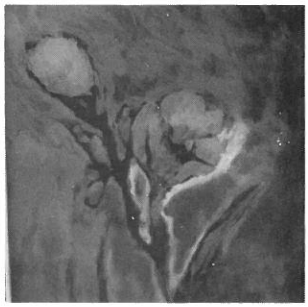
図Ⅴ　自 画 像（透明描法による）

① デッサン	② 描きはじめ
③ 完成作品	④ 完成作品

図Ⅵ　ガラス絵

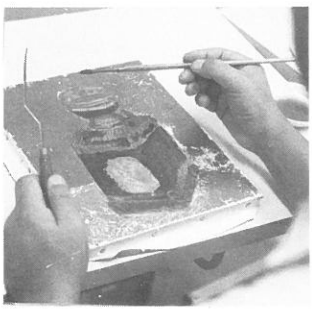






① 転写し 水彩で描く	② 油絵の具で
③ 地塗りにあたる最終的な塗り	④ 完成作品 （部分）

図Ⅶ　箔を使った表現



① デッサン	② 箔を置く
③ 描きこみ	④ 描きこみ

として抽象的な背景，空間表現に用いられている。ここでは，金地独特の抽象的な空間を生かしたり，モチーフの金属の部分の質感表現に金箔を使用し，細密描写で仕上げようと試みた。

3－Ⅲ　実施結果からの考察

鑑賞と制作は切り離すことのできないものであり，双方関連させて実施することが，理解を深めるという点で有効である。様々な技法や課題をこなすことは，学習者それぞれの制作における問題を解決するために，有効であるが，あまり堅苦しく考えてしまうとかえって興味を失い学習自体に興味を持てなくなってしまう恐れがある。課題の内容に余裕を持たせ，様々な技法や材料を体験しながら，最終的には，学習者各々の個性が反映された作品となるよう指導していくことが大切である。

4．今後の課題

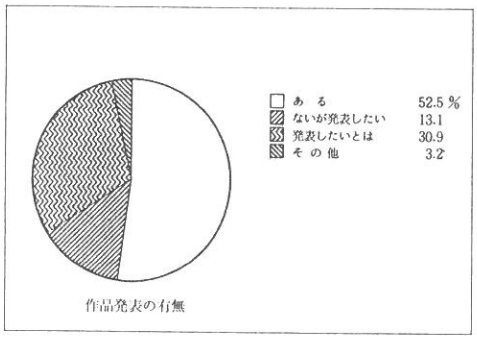
今後の課題は，作品の発表ということも含め，学習者の作品をどう日常生活のなかに生かしてゆくかである。先の調査結果[3)]では，作品発表について，すでになんらかの形で作品を「発表したことがある」人が，学習参加者の半数を超え，さらに「発表したいと考えている」人を加えると，全体のほぼ3分の2が作品の発表を考えていることがわかる。今日，幾つかの公募展や，コンクールが催されているし，公募対象を専門家でない人々に限定したものも幾つか見受けられる。さらに，貸し画廊をはじめ様々なスペースで，グループ展や個展といった形の発表も見られる。作品を発表するということは，制作意欲を高めたり，自分の作品を客観的に見ることができるという点，学習者や指導者との交流がはかれるという点で，有意義である。こうした現状から考えて，今後考えてゆかねばならないのは，公に発表すること以外に，出来上がった作品をどう日常生活に生かし楽しんでゆくかということではないだろうか。

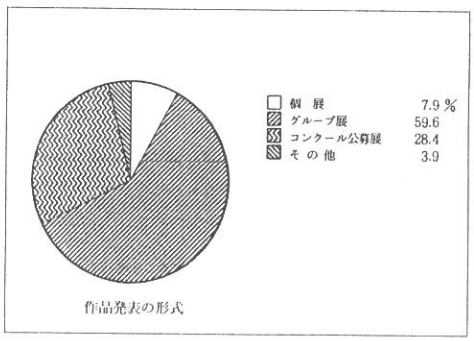
最　後　に

美術作品というものが社会的に広まり現実に我々市民のものとなってきたのはそう昔のことではない。美術作品を飾るというのは，長い間，教会であったり，王侯貴族や上級市民に限られていた。近代，現代の，市民の地位向上，生活レベルの向上があって美術作品は，我々の生活の中で欠くことのできないものとなり，実際に制作すること，鑑賞することを通して，我々の生活は豊かになってきた。こうした生活がさらに充実するように，生涯学習のなかの美術が意義ある内容を持ち実施されてゆくことを希望する。

最後に，研究の趣旨を理解し，調査，あるいは実際の制作に協力してくださった皆さんに感謝いたします。

注1）生涯学習のなかの美術・つくば市における美術教室参加者の意識と学習要求の調査
　1989年5～7月にかけて実施　筑波大学芸術研究報10（27～63ページ）参照
2）カリキュラムを実施したサークル・講座
　・アトリエ吾妻・農林省美術部（つくば）・西武つくば店コミュニティカレッジ日曜集中油絵教室
　なお実技編で示した制作過程の写真は，すべて上記のサークル・講座でのものである。
3）作品の発表に関する調査結果
　作品発表の有無と形式（前出の調査結果から）





関　崎　　哲

参　考　文　献

・平沢　薫　「教育的行動学－生涯教育のシステム化－」　第一法規
・新堀通也　「現代生涯教育の研究」　ぎょうせい出版
・宮脇　理　「現代美術教育論」　建帛社
・「教育の方法７　岩波講座　美の享受と創造」　岩波書店
・Ｂ・エドワース　「内なる画家の目」　エルテ出版
・Ｍ・デルナー　「絵画技術体系」　美術出版社
・Ｂ・ダンスタン　「印象派の技法」　グラフィック社
・石踊紘一他　「日本画の表現技法」　美術出版社
・Ｆ・カステル　「人物画論」　白水社
・Ｈ・ジャンソン他「美術の歴史」　創元社

平成２年11月30日受付
平成２年12月４日受理